シリーズ Face

取材・文　森分 志学

情報発信って一体なんでしょうか。

1枚の写真の中に、魅力的なスーパーカブ（バイク）と素敵な風景が写っているInstagram「こばんとソラコ」。フォロワー数1.5万人のこのアカウントを運営する小林美希さんは、浅口市を拠点に情報発信分野で活躍するフリーランス。ライターとしてまちづくりに関わる小林さんの情報発信に対する姿勢について、お話を伺いました。

まちを応援するライティング、お手紙だと思って書いています。

小林さんは大学を卒業後、ジャパネットたかたに就職。テレビショッピングのディレクター・デザイナーとして約9年間従事しました。退職してからは実家のある大阪に戻りますが、都会よりも地方で自然と暮らす方が合っていると考え、浅口市の地域おこし協力隊を選びます。

協力隊では、浅口市の情報発信で活躍。Instagramアカウント「あさくちさんぽ」を立ち上げ、Instagramユーザーに写真を投稿してもらうことで、みんなで浅口市の情報発信をする仕組みをつくるなどしました。3年間の任期満了後は、愛車のカブや協力隊時代の経験を武器に、フリーライターとしてまちづくりや周辺の観光、自身の趣味であるバイクの記事などを執筆しています。

執筆時に小林さんが大事にしていることは大きく2つ。1つは、その情報を誰に伝えたいかを明確にし、ターゲットにとって分かりやすい文章を書くこと。もう1つは、誰かの取り組みを記事として発信する場合、その取り組みをしている方へのお手紙だと思って書くことだそうです。読者に向けて書くことはもちろんですが、自分の書いた記事が、取材した人の背中を押したり、モチベーションを上げたりして、「明日からまた頑張ろう」と思ってもらえることを心掛けています。この考えは、協力隊で地域の人たちと関わったことで生まれてきたと話す小林さん。記事にすると喜んでもらえたり、「またお店に来てね」と言ってもらえたり、人との関係がつくられていくと言います。北木島の石でアクセサリーを作っている方の記事では、それをきっかけにテレビ取材が入り、ブランディングや集客に貢献できたり、上竹ホタルを守る会の記事では、ホタルの観賞に来てくれる人が増えたりと、小林さんの記事がまちに貢献しながら、ご縁も広がっています。

小林美希さん

インタビューすることは、取材する人の言語化を手伝っている行為でもあります。そのためには、その人の背景をどれだけ理解できるか、下調べはもちろんのこと、質問力も重要で、小林さんはまだまだ磨いていきたいと話します。その人を理解したいという姿勢は、書くことと人とつながることが隣接している小林さんだからこその感覚のようにも思えます。また、取材に必要なディレクション能力は会社員時代に鍛えられたのだそうです。

現在は、ライターの仕事は徐々に減らして、Instagramの発信に関するレクチャーや運用代行の仕事を強化されています。一方で、まちのために活動する人の応援になるような記事は継続して執筆。小林さんにとってのライティングは「手紙を書く」という意味がより強くなっているのかもしれません。

今後は、自由度を持って働きたい方たちと一緒に仕事をつくり、かつ社会に貢献できるような体制を構築しようとしています。小林さんのような、仕事としての情報発信と地域を応援する情報発信が融合できる在り方を広げるべく、情報発信のサポートができる人を育てることへの挑戦が始まっています。

ええがLabo代表
小林 美希
Kobayashi Miki

大阪府出身、岡山県浅口市在住。大阪女子大学卒業後、長崎県と東京都で9年半、テレビショッピングのディレクター・デザイナーとして勤務。退職後、2017年5月～2020年4月、浅口市地域おこし協力隊としてまちの情報発信を行う。現在は個人事業主となり、SNS集客サポート、講師業、ライターなどを行う。趣味はホンダスーパーカブでの旅。47都道府県を走った。好きな道はしまなみ海道。

NPO法人だっぴ 代表理事
森分 志学　Moriwake Shigaku

1990年、岡山県倉敷市生まれ。大学院生時代に、高校生と大人の対話プログラムを高校と連携してつくる。卒業後は、教育系の広告代理店に勤務して、高大接続の領域に関わる。2017年に岡山にUターンしてNPO法人だっぴに入職し、2020年より現職。県内15市町村50校以上の学校や自治体の学校教育・社会教育に携わる。